

未来眼やまがた 第1回

庄内の豊かな技術力と文化の発信

2005年が幕を開けた。先の見えない不透明な世の中といわれるなかで、日本は、また庄内は来るべき未来にどのように対応すべきだろうか。庄内が目指すべき未来像について善寶寺の齊藤信義さんに聞いた。

時代の大きな変わり目

町田 齊藤さんは教育にたいへんご熱心で長岡技術科学大学（新潟県長岡市）の設立にも尽力されたと伺っております。齊藤 この大学は技術革新の下、産学官の協同を目指す新構想の大学院大学として先導的役割を果たしたと思います。国

齊藤 信義（さいとう・しんぎ）

1918年山形県生まれ。東京大学文学部卒業。興源院首住職等を経て、82年より善寶寺住職。2003年より大本山総持寺副貫首。長岡技術科学大学副学長、鶴見大学理事長等を歴任。

際化時代を迎え、夢はアメリカに追いつき追い越せでしたが、高度に発展しつつある情報化社会に対応する創造的技術の開発に貢献し、また大学の国際化を積極的に促進することを狙いとしました。新構想らしく、いろんな試みに挑戦し、例えばインターンシップ制度を導入し、また日本で初めて学内に技術開発センターを設置して、客員教授に本田宗一郎氏を迎えました。さらに「コンピューター大学」といわれただけあり、教育研究のみならず、事務機械、学生生活までカード化し、地元銀行から協力頂きカード一枚で大半のことを可能にしました。また工学系大学院大学としては画期的なことですが、文化構造学、生命科学、計画科学から6単位を必修としました。国際社会を生き抜くためには、自国の文化がわかることと、相手国の文化を理解することが大切だと思います。その例として、インドネシアでの某日本企業の失敗はイスラム文化への理解不足が原因だったと思います。ODAの推進の前提は国際理解です。これからの国際社会においてはハードな経済力と武力も重要ですが、ソフトの力、つまり文化の力がより一層重要になってくると思います。

燃えるような思いは国や企業の宝

町田 最近、OECD（経済協力開発機構）から日本人の学力低下が著しいという調査結果が報告されましたが、教育の基本にもっと知識や技術を大切にすることがなければ、学校教育は中途半端になるような気がします。

齊藤 私はそれには大きく2つの理由があると思います。1つは戦後教育においてdiscipline（訓練）がおろそかになったことと、もう1つは技術教育が軽んじられたことではないでしょうか。私が小学校の頃は、教育勅語や詔書^{しやうしょ}を一字一句間違わずに書けるまで何度も練習しました。その時の先生は教え方が上手く、本当に素晴らしい先生方でした。技術教育については1970年ユネスコ（国連教育科学文化機関）が幼稚園から大学院まで、いかに技能・技術教育が重要であることを勧告しています。人類の歴史を思想史として振り返ると、^{かんしやうてき}観照的な、純粹思想な営み（theory）と実際の、実践的、実用的な営み（practice）の2つが交錯した歴史と



いえます。日本の戦後の教育界では実学を軽視し、学力テストの反対などの動きが見られました。それに対し産業界、経済界が反対して戦ってきました。国際的に見て、日本の戦後教育で成功したのは、工学、医学、芸術教育だけではないかとの評もあります。高等教育においても、訓練が甘いのではないかとの批判が起きています。息子が学んだニューヨーク大学院では、教授は学生に極めて厳しい課題を課していました。なぜ今、韓国、中国、台湾、シンガポール、インドが強いかというと、アメリカのハーバード大学などで鍛えられ帰国した人材が、新しい戦力となっているからと言われている。

町田 学問への意欲はハングリー（貧しさ）とも関連しているのでしょうか。今の日本は非常に豊かになってそのような意欲が出にくいのではないかと思います。

斉藤 そうと言えるでしょう。今、日本で問題になっているニート（NEET）についてもそうです。この問題がどこからきているのかということを考えなければなりません。比叡山の伝教大師の言葉に「国の宝とは、志を持つか持たないか」とありますが、まさに「燃えるような思いは国の宝」であると言えます。

町田 企業においても全く同じです。企業経営には燃えるような志がなければなりません。

斉藤 だからこそ、日本人に志をどう作るかということが重要になってきます。

町田 今は人間が仕上がるまでに時間がかかります。教育に時間がかかる時代になっています。そのため企業にとっても、人材を育成していくという役回りが大きいのではないのでしょうか。企業の中で社会人としての心構え、あるいは職業人としての志を学んでもらう。そのような責任を企業も背負っているのだと思います。今、CSR（企業の社会的責任）ということが盛んに言われていますが、企業は存在することそのものが公益的でなければなりません。そのためにこれから本業の中でいかに社会に貢献していくかということが極めて重要だと思います。

斉藤 私もそう思います。そのためにまずは企業人としての使命は何かということから教育していかなければなりません。企業も哲学をもって企業人を育てていかなければならないと考えます。

グローバル化とイノベーション

町田 現在のような時代の大きな変わり目のなかで、グローバル化の進展をどう捉えていますか。

Not in Education, Employment, or Training (NEET)
教育、雇用、職業訓練のいずれも行っていない若者を指す。



町田 睿（まちだ・さとる）

1938年秋田県生まれ。東京大学法学部卒業後、株式会社富士銀行入行。同行取締役総合企画部長、常務取締役を経て、94年株式会社荘内銀行取締役副頭取就任、95年より現職。

斉藤 ある学者の指摘にあるように、グローバル化の先駆は農業だと思います。日本の歴史において、大和民族の日本の支配はまさに米の問題だったのではないのでしょうか。アメリカは世界最大の農業国です。ウルグアイラウンド後のWTOでは農業が一番難しい問題でしょう。難民3,000万人と言われている今日、食糧問題の解決は平和と安全保障の点からも不可欠で、その点からもグローバル化は重要です。私は日本の将来を左右する鍵は社会のイノベーションとグローバル化ではないかと思っています。カレル・ヴァン・ウォルフレンがその著書で強く指摘しているように、「人間を幸福にしない日本というシステム」いわゆる55年体制を脱却して、成長戦略を構想し実行することが日本再生の決め手だと思います。そして中央・地方の構図ではなく、地域主権国家の構築が日程に上っている今日、世界の中の日本を厳しくみつめ、地域社会、地域共同体を基点に広い世界、グローバル化から地域経済をみて、行動しなければならぬと思います。庄内は、近年の歩みを振り返ってみても、イノベーションとグローバル化を生かした素晴らしい地域ではないのでしょうか。明治30年代、山形県の羽二重生産高の伸びはめざましく、その中でも西田川郡の地位は極めて高く、県内の90.2%と言われていました。生産が飛躍的に伸びた背景としてマニファクチャーの成長が指摘されています。私はイノベーションの点で大学時代の友人から、日本で初めてドイツから最新式の織機を入れたのは鶴岡だと教え

られました。庄内地方の輸出織物の発展は、常に改良発明に挑んだ技術革新がもたらしたものだと思います。そして輸出絹織物が低迷すると、酒田の久村清太氏が人絹発明で世界に名をはせました。同氏には私が東大生の時に同窓会でお目にかかりました。庄内は目指すべき未来像をすでに私たちに示していると思います。

地域開発と人間開発

町田 グローバリゼーションが進展すると、ますます地域が重要になるということですね。

斉藤 その通りです。グローバリゼーションを進めていくなかで地域は、EU(欧州連合)のように対等な地域として自立し、そのなかで地域の特色をいかに生かしていくかが必要になります。そのためには地域開発と人間開発が不可欠です。それによって、その地域を生活の場に行っている市民一人ひとりの生活が安全で生き生きとしたものにならなければなりません。開発という言葉はそもそも仏教用語で、「人間が本来持っている能力をいかに引き出して花を咲かせるか」という意味があります。これからの庄内の未来を展望する時に、庄内の地域力とそこに住む人間の力をいかに引き出すかが重要です。人間開発とは子どもはもちろんのこと、大人や老人がそれぞれ持っているものを生かした生き方をすることです。

真の公益とは

町田 庄内には東北公益文科大学もあります。

斉藤 同大学の小松学長は「日常生活の中からの公益性をどうするか」ということを言っており、これが東北公益文科大学の出発点となっています。私はパブリック(Public)とプライベート(Private)の中間に位置するコミュニティー(Community)は、「生活世界」と訳されるべきだと思っています。公益について考えるときに、このコミュニティーつまり市民社会の場、地域をどうするか、そこで生活する人がどのように関わるかが課題だと思っています。大阪府のPPP(Public Private Partnership)のような行政と民間が連携して公共サービスを実施するという取り組みは、その方法として良い例だと思っています。また阪神大震災や新潟中越地震でも多くの方がボランティアとして参加していることから、NPOやNGOの活動が当たり前になってきました。これからは生きることそのものが公益的なアクションであるという視点で、公益という概念を捉えていく必要があるのでしょうか。また東京大学の佐々木総長が中心になって進めている公共哲学というものがあります。これは様々な考え方を比較、分析、研究し、そのなかで共通点や一緒にできることがあればやって



善 寶 寺

いこうという考え方で、最終的にはスピリチュアリティ(spirituality)つまり精神性、霊性で回復しなければならないと言っています。われわれの宗教界も組織の殻の中に入ったものではなく、それを乗り越えるにはどうしたら良いかということが問われています。つまり組織の中に組み込まれてしまった教団でなく、一人ひとりの生活の幸せとは何かということをあらためて考えなければなりません。このことはあらゆる組織に問われている問題だと思います。そこでの私たちの役割は、日常生活のなかでの精神生活をどうするかということが課題になります。既成教団を乗り越えて、しかも世界のいろんな宗教の多元性を乗り越えて、一人ひとりの幸せをどうするかということをもう一度考えなくてはならないと思います。

町田 サミュエル・ハンチントンの著書「文明の衝突」はCivilizations(文明)の衝突といわれていますが、基本はCulture(文化)だと思っています。イラク戦争は一神教対一神教の戦いだとも言われていますが、日本の場合には、古来のアニミズム、神道、仏教にしてもいかなる神も許容できるという広さがあるといえるのではないのでしょうか。だからこそ、この日本の文化に育った人々は世界の調和のために、大いに力を発揮することが出来ると思います。

庄内の文化を発信

町田 ところで、庄内の文化は上方と江戸の文化、さらに東北地域の伝統のなかで作り上げられた、非常にユニークな文化であると思います。また庄内の将来を

考えた時に、今申し上げたユニークなそして素晴らしい文化がポイントになるのではないかと考えます。しかし文化を育てるには経済の基盤も必要だと思います。齊藤 おっしゃる通りだと思います。インフラとしての経済発展を考えた場合、前にも述べたように何といてもグローバル化に積極的に対応しなければならないでしょう。グローバル化は市場の世界化ですから、日本の庄内ではなく、常に世界の庄内という軸足に立って世界を見ていかなければならないと思います。そして、このグローバル化の中においても大切なのは文化の力、つまりソフトの問題をどうするかということです。アメリカが、ハリウッドにみられるような映画産業のソフトに力を入れていることをみてもわかります。また最近の韓国も同じで、あれだけ盛り上がり、いかにソフトが重要であるかがわかります。そのような独自の文化を大切にしなければなりません。庄内は大川周明、阿部次郎など多くの逸材を生み出した地域です。最近では藤沢周平がいます。山田洋次監督によって「たそがれ清兵衛」や「隠し剣 鬼の爪」が映画化され、NHKでも「蝉しぐれ」が放送されました。私の知人にも多くの藤沢周平の愛読者がいます。これほど藤沢周平や庄内に惚れている人が多いのですから、庄内はそのようなソフト力、文化の力を発信することが大きな財産になると思いま

す。

観光は良き人に出会うこと

町田 その点から考えますと、文化を共有するインフラとしての観光が大事だと思います。観光によって交流人口を増やすということ。これからは外から多くの人が庄内に来ていただけるような、受け入る側としての庄内の観光を大事にしなければならないと思っています。

齊藤 21世紀は世界をあげて観光の世紀とも言われています。そこで観光においても基本となるのはやはり人であるということです。観光は中国の易経からきた言葉ですが、その土地の景色を見ることの他に、そこで良き人に出会うことという意味があります。庄内を訪れた人にとって、そこで出会った人が親切だったと言われる、そのような地域にしていかなければなりません。中国では「行ってみたい。遊んでみたい。住んでみたい。最後はそこで死んでいきたい」これが本当の土地だと言われています。庄内も同じように「庄内に住んでみたい。そこで死んでいきたい」と思われる地域にならなければと思います。庄内には豊かな自然と貫禄のある文化、そして多くの素晴らしい人材が生まれています。



庄内平野（眺海の森より）